

アメリカ映画と人権意識

三輪 昭子

要 約

映画は大衆文化であり、社会を映す鏡でもある。

アメリカにはハリウッドという映画をビジネスとする拠点があるが、興行成績を意識する限り、社会の在り方とかけ離れたものは制作できない。ハリウッド以外のところでの制作も、同様である。

本稿はアメリカ映画を素材にし、アメリカ社会や人権意識を知る教材に活用するために、「平和と人権」展開講座でとりあげるようになって、映画のテーマ・内容を分類することの必要性を感じ、それを試みるのが目的である。

キーワード：アメリカ映画、社会を映す鏡、人権、テーマ分類

1. はじめに

継続的に映画を観る習慣ができてくると、その映画が誕生した背景や、現実世界と比較をし、それが納得できる内容なのかを考えることがある。この行為は映画を批判するために行うものでなく、映画の中で描かれる人生を模擬体験し、自分がどんな人生を選択したいのかを考える材料にしていると言える。人生は一度しかないからこそ、想像力を働かせて映画の世界を旅しているのである。

筆者は 2001 年度から主題科目「平和と人権」の展開講座を担当している。その講座内で、人権を教材として扱うためには感性による受容が必要だと思い、映画を素材として考える時間を積極的に作り始めて、2 年目を終えようとしている。

個人的に映画を観るのは好きであるし、名古屋市の女性教育機関での主催講座¹を受講し、受講終了後、「映画を素材にして女性の生き方を考える」ことを学習目的とした自主学習グループを当時の受講生で立ち上げた。現在は定期的に学習会を実施するに至っている。

冒頭でも少し触れたが、本稿の姿勢はアメリカ映

画を批判する目的のものではない。さまざまな映画の中に描かれている人権意識を確認し、今後の教材として参考になる資料を蓄積し、整理し、活用できるようにするためのものである。

また、今回はアメリカ映画を中心に考えるため範囲を限定しているが、それはアメリカにはハリウッドという映画をビジネスとする拠点が存在し、多くの映画を世界中に配給しているためである²。しかし、日本に配給されている他地域の映画にも目を向け、人権意識に関して参考になりそうなものを、比較資料として整理しておきたい。

2. 国際人権条約とアメリカ合衆国

国際社会をテーマとして掲げて講座を実施する時、必ず話題にする内容が、この項目である。

そもそも国際人権条約とは何のために存在するのか。第二次世界大戦後、人類が世界平和を希求し人権の重要性を示したのが、「世界人権宣言」であった。しかし、この宣言は、結果的に単なる宣言に過ぎなかった。いくら内容的に素晴らしいものをもっていたとしても、法律的な拘束力はないので、それ

を遵守する義務は発生しないからだ。結局のところ人権は大義にはなっても、世界の人々に根付き、守られてきたという実感が持てないのである。また、時代の流れによって人権の考え方は変わっていくものである³。

そのような事情を背景に考え出されたのが、各種の国際人権条約⁴であった。人権条約を批准し、条約に加入すれば、条約の締結国としてそれらの規定を遵守する義務を負う。締結国なら批准した条約と国内法との関係に矛盾が生ずれば、国内法を改正していかなければならない。そうすることで、国全体がその人権条約についての理解を深め、人権擁護の精神を育てることになるのである。

さて、筆者が国際社会という視野をもって重要だと考え、講義内で取り入れているのは、3つの人権条約、すなわち人種差別撤廃条約、女性差別撤廃条約、子どもの権利条約、である。これらの条約は人種、性別、子どもという、人間には避けて通れない基本的現実である。誰もが選択権を持たずして与えられたものである。これによって不利益を被らないようにと考えるからである。

これら国連が中心となって作成した、人種差別撤廃条約は1965年、女性差別撤廃条約は1979年、子どもの権利条約は1989年に、それぞれが国連総会で採択されている。

これらの人権条約に関するアメリカの態度は、政府がそれらの条約を批准しているかどうかで判断できる。条約を批准した結果、国内法との矛盾が発生すれば、国内法が改正され、その法律が広く知られるようになっていくので、自然と国民の意識も変化していくと考えられるからである。

人種差別撤廃条約は1966年に署名、1994年に批准している。他の二つの条約についての署名はしているものの、まだ批准には至っていない⁵。

3. 人権意識に注目した映画鑑賞

映画鑑賞によって人は何らかの影響を受けるが、何らかの視点を得ることによって、内容が明確になり、一層の理解ができる。映画は大衆文化のひとつと分類される⁶が、社会を映す鏡でもある。ひとつの、ある映画には成立する背景が必ず存在し、それを読み解くことが、映画の、ひいては社会の在り方や人権意識についての理解になるのである⁷。

ここでは映画のテーマを分類するために、4つのカテゴリーに分けて述べていくことにする。以下、(1)人種・民族、(2)女性の生き方、(3)性の境界線を越えて、(4)子どもの存在、に便宜上分けることにする。また、例示する映画作品には、できるだけ1990年代以降のものを選んだ。

4. 多民族国家を象徴するもの

アメリカは移民国家と位置づけられ、歴史的に多様な地域を出身とする人々、すなわち多様な民族集団を受け入れ、アメリカ人としてきた。アメリカにやってきた人々は、アメリカ人になるため、アメリカの諸制度や基本理念を受け入れてきたが、世代が新しくなったとしても、故国の民族的伝統を根強く存続させてきた。

歴史的過程で、アメリカ人を形成する考え方は、同化主義から多文化主義へと移行し、現在では「各民族の特性を生かすことができる」という多文化主義の方が一層支持されている。

そのような民族集団の存在を背景とした作品ばかりでなく、人種・民族に関わる差別や偏見を知らせるような作品が登場している。前者は異文化理解の材料となるようなものが多いのに対し、後者は差別や偏見の現実を告発し、その問題を観客に投げかけるというものである。

どの民族集団についても、その伝統なり、生き方なり、家族観を示すような映画が制作できるとは限らない。移民の中でも社会的上昇を果たした民族

が、資金力なども手伝って、例えばユダヤ人は映画や演劇に大進出した⁸。

ただユダヤ人の場合、WASP と呼ばれる白人で、アングロサクソン系で、プロテスタントである人々がエスタブリッシュメントとして、アメリカ社会に君臨していたので、ユダヤ人ということをあからさまに示すことはできなかった⁹。

それでも、民族集団のありようを知ることができる作品は数々存在する。それは、その民族集団出身の英雄的存在の人物史 (①)、歴史的事件 (②)、ある家族の様子 (③) の3種類に大別することができる。

(1) アフリカ系アメリカ人 (アメリカ黒人)

①として、1960年代のキング牧師と並び称される黒人解放運動指導者を描いた「マルコム X」(1994年)、1964年に若干22歳で世界ヘビー級チャンピオンとなった黒人ボクサー、カシアス・クレイ＝モハメド・アリ (賞賛されるべき人、の意味) の激動の半生をつづったものとして、「アリ」(2002年)がある。

②として、100万人の黒人男性のパレード、ミリオン・マン・マーチに参加するため、首都ワシントンDC行きの大陸横断バスに乗り込んだ12人とバスの運転手の心の交流を描いた「ゲット・オン・ザ・バス」(1996年)、1839年に実際に起こったアミスタッド号事件を題材にした作品、「アミスタッド」(1997年)では、ほとんど知られていなかった事件を背景にし、人間の自由とその獲得への過程が描かれている。

アフリカ系というと、社会的最下層にある民族で、貧困と犯罪にまみれているという先入観がありがちだ。しかし、アフアーマティブ・アクションという法的措置¹⁰によって社会的上昇が可能となり、中産階級に位置づけられる黒人家庭も出現するようになった。その代表的な家庭像を、「ソウル・フード」(1997年)では、おばあちゃんの手料理で大家族の絆の行方を、少年の視線で見つめるという手法

で描かれている。「天使の贈り物」(1996年)では、牧師夫婦の心のありようが描かれている。

(2) ホワイト・エスニック¹¹

アイルランド系は1840年代後半にジャガイモ飢饉でアメリカ移住が大量になされていて、アイルランドが素材になった作品は比較的多い。①に当たるのが、IRA (アイルランド共和国軍) の指導者であり、20世紀で最も重要な政治的リーダーの1人に数えられるマイケル・コリンズの半生を綴った伝記である「マイケル・コリンズ」(1997年)がある。

1974年のロンドンで起こった爆弾テロ事件の犯人という汚名を着せられる冤罪事件を描いた「父の祈りを」(1993年)は②に分類できる。一方、19世紀のニューヨークでのアイルランド移民たちの様子を描いた「ギャング・オブ・ニューヨーク」(2001年)がある。移民排斥の様子を知る材料にはなるが、移民間の争い部分がクローズアップされすぎていて、一種の戦争映画になってしまっている。

さらに、③として、ボクサーとして再起をかける元IRAを描く、「ボクサー」(1997年)、アイルランドでの極貧の少年時代の思い出を描いた、「アンジェラの灰」(1999年)がある。アイルランドからニューヨークへの移民生活の中で家族の再生を描く、「イン・アメリカ」(2003年)はアメリカ映画ではなく、アイルランドとイギリスの合作で、アメリカに根を張ろうとしている家族を垣間見ることができる。

その他、テーマはさまざまであるが、分類の③に含められる異文化理解的要素を持ったものが、他の民族集団にもある。まず、ポーランド系アメリカ人が多く住むデトロイトのポーランド系の一家を描いた「自由な女神たち」(1997年)、封建的だと思われるユダヤ社会で生まれた女性を通してユダヤ社会が描かれる「しあわせ色のルビー」(1998年)、ギリシャ系アメリカ人の結婚をめぐる騒動が、文化や考え方とともに描かれている「マイ・ビッグ・ファット・ウェディング」(2002年)などをあげることが

できる。

(3) アジア系アメリカ人

アメリカ移民として定着したアジア系として大規模な民族集団は、中国系である。彼らはアメリカにやってきた最初のアジア人でもあった。その中国人が最初に移民禁止措置をも受けた¹²。それに代わって増えたのが日本人であった。

世界大戦後、特に 1965 年の移民法によって、移民制限が廃止されると、アジア系移民は驚異的な増大を見るに至った。中国、日本に限定されないで、フィリピン、インドなどを始め、ベトナムから移民が殺到するようになった¹³。そのような異人種・異民族を受容しようという意味が込められているのだろう。分類③に含まれる異文化理解的作品が比較的多いと思われる。

世代間差から祖国とアメリカ世代の違いを、文化的ギャップに言及しながら描いている作品が存在する。「ジョイ・ラック・クラブ」(1993 年)では、移民として故郷の中国から苦難の人生を背負って生き抜いてきた 4 人の母親と、アメリカ人として生まれ育った 4 人の娘たちの世代間の相違と心の絆が描かれている。

アメリカで映画関連の教育を受け、現在も活躍中のアン・リー監督は出身地である台湾をモチーフにして 3 部作¹⁴を完成させている。そのひとつに、「ウェディング・バンケット」(1994 年)がある。この作品では、NY で成功し、帰化したゲイの台湾人青年のところに、彼がゲイだとは思っても知らぬ両親がやって来ることで、世代間のギャップを考えさせるものになっている。

一方、日本人の場合は歴史的事件を背景にして、文化を紹介するものから最近の企業文化に関わるものまで存在する。分類上は、②と③の混合型と言うことができる。例えば、「愛と哀しみの旅路」(1990 年)では、ロサンゼルスのリトル東京に住む日系 2 世の女性を通して、強制収容所や黄禍の被害について語られ、「ヒマラヤ杉に降る雪」(1999 年)では、

日系人女性との恋愛を引き裂かれたアメリカ人男性の視線を通して戦時中の日系人たちが語られている。

1980 年代の日本企業のアメリカ進出が盛んだった背景を素材に、ミステリー仕立ての文化紹介のような作品となったものには、「ライジング・サン」(1993 年)がある。この作品には観る人に誤解を与えるような部分があり、アメリカでは、公開時にジャパン・バッシングと問題になり、アジア系アメリカ人の抗議行動も行われた。

インドシナ半島はアメリカ史上大きな苦難となったベトナム戦争の戦場となった地である。このベトナム戦争がアメリカ社会に与えた影響はきわめて強く、それにこだわって映画づくりをしている監督すら存在する。そのオリバー・ストーン監督¹⁵が、ベトナム出身女性の波乱の生涯を回想した L・リー・ヘイスリップの自伝を映画化した「天と地」(1993 年)がある。ベトナム戦争で出会った米兵と結婚し、アメリカ社会で生活していく中で彼女が感じたアメリカが語られている。

ミュージカルで有名な「王様と私」が 3 度目の映画化となった「アンナと王様」(1999 年)は、タイがヨーロッパの植民地支配を回避しようとしている政治的背景を含め、タイの文化や社会基盤を学習できる素材となっている。

同じアジア系でありながら、アメリカ先住民としてアメリカ・インディアンと称されてきたネイティブ・アメリカンについて知る大作は、すでに「ダンス・ウィズ・ウルブス」(1991 年)と「ラスト・オブ・モヒカン」(1993 年)があるが、すべてがネイティブ・アメリカンによって製作された「スモーク・シグナルズ」(1998 年)では、彼らの家族の現在が描かれている。

(4) ラティーノ (ヒスパニック系)

アジア系とともに、1965 年の移民法制定の結果爆発的に増大を誇った移民が、ラテンアメリカ出身のスペイン語を話す移民たちである。その移民数の増

大さを示す数字として、アメリカ移民帰化局 2000 年
年報 HP¹⁶ では、1981 年からの 10 年間と 1991 年
からの 10 年間で比較すると、割合は 48.3% から 73.68
% となっていて、他にこれほどの増加を示す地域は
ない。

具体的な地域としては、プエルトリコ、キューバ、
メキシコで、その圧倒的数はアメリカの南に位置す
る陸続きのメキシコからの移民で、それは合法、非
合法を考えるとかなりの数になるはずである。

① に分類できる作品として、メキシコ出身の画家
フリーダ・カーロの生涯を描いた「フリーダ」(2002
年) は、メキシコ文化や社会を知るきっかけを与え
てくれる。また、実在するのかどうかはわからない
が、メキシコ民衆の英雄ゾロを描いた「マスク・オ
ブ・ゾロ」(1998 年) から、スペイン統治下のメキ
シコの様子や雰囲気をも十分に知ることができる。

2000 年ロサンゼルスで起きたビルサービス労働
者たちによる労働運動を映画化した「ブレッド&
ローズ」(2000 年) という作品がある。これは、ア
メリカ映画ではなく、イギリス出身のケン・ローチ
監督によるイギリス・ドイツ・スペインの合作映画
となっている。不法就労のラティーノが抱えている
アメリカの富と搾取の皮肉な現実を、不法入国者で
英語が話せず、複数の賃金労働と家事で疲れ果てて
いるのにもかかわらず、経営側から日々代用雇用や
強制送還の脅しにさらされている様子を描いてい
る。それだけに終わらず、ジャンターという清掃
サービスの人々を組織化し、労働運動へと団結して
参加を促し、経済的な権利と尊厳を求める運動で、
勝利が可能であることを伝えているのである。この
映画のタイトルとなっている「ブレッド」は生活を、
「ローズ」は尊厳を示す象徴として使われている¹⁷。

ラティーノの文化や社会を示すものは数多くあ
るような気がする。彼らが母国語や文化を維持し、
アメリカ社会に同化するよりも自らの文化を強烈
に示しているイメージがあるからだ。そんな彼らの
文化や家族観を知ることのできる作品として、NY
でミュージシャンとしての成功を夢見てやってき

たキューバ移民を描いている「マンボ・キングス」
(1992 年)、アメリカン・ドリームを求める、あるメ
キシコ系一家の三世代、60 年にわたる家族史を描い
た「ミ・ファミリア」(1995 年) があり、これらは
③ に分類できる。

(5) WASP

移民とは位置づけられないが、イングランド系白
人が正統派の白人であること、プロテスタントの白
人ということを強調する意味合い¹⁸ で使われる
WASP は、自分の民族性に誇りを持ち、多数派であ
ることを強く意識したとして、差別的になる姿勢を
有する階層である。

WASP による支配体制を徹底して具現化している
象徴は、ウォールストリートとワシントン DC であっ
た。すなわち、ビジネスにおいては NY のウォール
ストリートを目指すのが、アメリカの経済エリート
として自然なことなのである。そんな WASP を家庭
という視点で見れば、血統を重視する傾向にあっ
た。

WASP 家庭では、母が家庭の女王たる存在で、そ
の母自身も自分をコントロールし、ものに動じない
状態でいなければならない。そんな家庭像を意識で
きるような作品が存在する。分類の③に入るものと
して、すでに古典的な存在になっている「普通の
人々」(1980 年)¹⁹ があるが、最近にも、その家族
像を考えさせられる作品が制作されている。「アイ
ス・ストーム」(1997 年)、「エデンより彼方に」(2002
年) などがある。後者では、1950 年代後半という時
代背景に、WASP 家庭の理想的な主婦が、夫や近隣
の主婦仲間、庭師という人物を通じて、異人種間の
関係を世間がどう見ているのかが、語られる。

(6) 異文化理解の精神

特定の人種・民族を対象にしてはいないが、それ
を髣髴とさせる内容が感じられ、人間存在自体を考
えさせられる作品群が存在する。

11 世紀の中東アジアとヨーロッパを背景にした

「13 ウォリアーズ」(1999 年)という作品がある。生物のすべてを食い荒らしてしまうという伝説の怪物を倒すため、13 人の戦士が結集するが、それには 12 人の北の戦士のみでは不足で、13 番目には北以外の出身者が必要という言葉に、イスラム帝国出身の一人の男性が参加することになる。その男性が戸惑いながら北の文化を理解し、言葉を習得していく。さらに、怪物退治の場面では、その怪物が熊の毛皮を頭からまとった人間であることを明かし、なぜ人間が怪物になってしまうのかを考えさせられる秀作である。

また、人間を人間たらしめるには、人間による教育が不可欠であると言われている。「ヒューマン・ネイチュア」(2001 年)では、自分が猿だと思っている野生の男性が登場し、人間としての再教育を生物学者によってなされるというものである。ここでは、人間を奇妙な生き物として観察する機会が与えられている。

想像上の設定でも一見に値するのが、「X-MEN」のシリーズである。シリーズ 2 の「X-MEN2」(2003 年)では、人類と次世代の種族であるミュータントの共存共生を望むような設定となっている。

「猿の惑星」(2001 年)という作品がある。オリジナル作品は別の監督によって製作された 1968 年で、2001 年のものはリメイク作品である。このオリジナル作品は社会に大きなインパクトを与えたと言われている。1960 年代の公民権運動の結果、ヨーロッパ系の白人数は減少し、ラティーノやアジア系が増加した現象を、人間のように言葉を話す人間のような猿を登場させることで、物語を設定したと考えられている²⁰。リメイク版では、パートナーシップと共生を促すメッセージが感じられる展開だ。

(7) 差別の現実

すでに 21 世紀を迎えた現在、差別の対象となるものは、人種・民族、性別からゲイ、HIV 感染者へと範囲を広げている一方で、あからさまな差別はあってはいけないものという認識がある。

差別をテーマにした作品は 1980 年代にも存在し、かなりのインパクトを観る者に与えた。例えば、「ミシシッピー・バーニング」(1988 年)や「背信の日々」(1988 年)は、実際に起きた事件から着想し、制作されたようだ。つまり、映画は事件を告発し、世間に公表するという役目を負っていたように思われる²¹。

それに対し、1990 年代以降は裁判等で何らかの決着をつける手法をとっているものが多いようだ。人種差別として「評決のとき」(1996 年)、「ザ・ハリケーン」(1999 年)は、その結果として黒人の無罪が証明されている。一方、HIV 感染者を原告とした不当解雇の裁判で、人間の尊厳を回復させようと挑んだ「フィラデルフィア」(1993 年)がある。この作品にはさまざまなマイノリティが登場しており、原告弁護士に黒人男性、被告弁護士に白人女性という配役になっている。

5. 女性の生き方を考えて

筆者自身が仕事を持って生きるのが当然と考えてきたように、女性が社会進出するのが普通のことになってきた。そんな中で、女性に対する周囲の観察眼は男性へのそれよりも多く存在し、偏見や先入観をもって見られる部分が多いようだ。まして、男性の領域に入っていくことなど、問題外という考え方がある。

また、性別で就くべき職業が暗黙のうちに決まっていて、男性の補助的仕事を担当するものであったり、伝統的な女性の仕事²²に偏り、職業の性別分離が続いている。特に 1970 年代以降、女性はあらゆる分野に進出したと言っても、専門職やビジネス界の上級管理職への昇進は現実的に困難である。ここでも、男性の領域へ入ることは堅く禁じられているように思える。

しかしながら、女性が家庭を守ると言われていても、家事の中心は女性であっても、家事や家族に関わる決定権は男性にある。女性の生き方を決定する

要素が多いにもかかわらず、女性はその決定権を持ってない。つまり、女性は自分の人生を決定する自己決定権が持てないのだ。

以上を踏まえ、先入観を持たれやすい女性の外見の部分に注目した作品として、髪の色が与える偏見を題材にした、「キューティ・ブロンド」(2001 年)がある。ブロンドの与えるイメージはミーハーであるとか頭が悪いというもので、知的な職業には向かないと思われている。アンカーとして成功するために、ブロンドを染めて知的なイメージを与えやすい黒茶系にするというものが、「アンカーウーマン」(1996 年)であった。これら二つの作品は、アメリカの東海岸では黒茶系が好まれるという地域の特徴をも現していた。他にも、趣旨がややずれるが、男性のブロンドに対するこだわりを描いた「リアル・ブロンド」(1999 年)がある。

家庭内や女性自身の人生についての自己決定権について描かれた作品もまた、秀作が存在する。すでに取り上げた「エデンより彼方へ」や、「めぐりあう時間たち」(2002 年)にも、一見幸せに見える家庭の中で、人間として自立して生きたいという女性の悩みが感じられる。

女性が男性の領域へ進出することで、男性からの敵意を買いやすい。殊に男性を象徴する世界は、それが顕著である。例えば、軍部へ進出した女性たちを描いた「戦火の勇気」(1996 年)や「G.I. ジェーン」(1997 年)、そこでのエリートを意識した「將軍の娘」(1999 年)などは、男性の嫉妬心が濃厚に感じられる。スポーツの場面でも同じことが言える。男性らしいスポーツは特にそうであるようだ。「ガールファイト」(2000 年)では、ボクシングで自己実現を図ろうとする女子高校生に、男性選手は冷ややかな視線を投げつけている。

女性が男性の領域に入れば、当然逆の場合もある。それは、好む、好まざるに関係なく、現代の男性が考えなければならない問題である。妻がいなくなった後に、家事と子育てに慌てふためく情景は、すでに古典のような存在の「クレイマー・クレ

イマー」(1979 年)で描かれているが、現代には育児に夢中になってしまう男性の存在も描かれる。「クール・ドライ・プレイス」(1999 年)は設定が「クレイマー・クレイマー」に似ているが、「二番目に幸せなこと」(2000 年)はその典型的な作品である。

このような動向を逆手にとって、家庭や家事における男性の適性を利用した「私の愛情の対象」(1998 年)では、一人の男性でなく、複数の男性と役割分担をして子育てをする女性の姿がコメディタッチで描かれる。

女性の生き方を考えていくと、男性の生き方にもつながってくる。そのような点に注目し、従来とは違った男性の生き方、特に男性性を強調しない人物を登場させる作品が出てきている。かつて、「女性らしさの神話」というものがあったが、現代は「男性らしさの神話」を考える時代になっているのだろう。

「バッファロー 66」(1998 年)や「シッピング・ニュース」(2001 年)、「サンキュー・ボーイズ」(2001 年)では、そのような男性が存在し、女性に支えられて生きていく図が描かれる。

また、人生において、男性が体力的な力を失うのが老年期であるが、その年代をどう生きるのかを考えさせる「プレッジ」(2001 年)や「アバウト・シュミット」(2002 年)がある。特に後者は、退職後の男性が抱く寂寥感を雄弁に描いている秀作と言える。

6. 性の境界線を越えて

男性に比べて女性の場合、まだゲイという領域は広く承認されていないように思える。近年、性同一性障害によって男性から女性に変更しようとするニュースは伝えられるが、女性から男性へ場合はわずかである²³。

そのような事例として、実話を映画化した「ボーイズ・ドント・クライ」(1999 年)がある。これに

は、性の問題以上に社会に根深く存在する偏見との闘いをも感じさせる、重い内容を持った作品である。男性として生きた女性の物語をドキュメンタリーとして映画化された「ロバート・イーズ」(2000年)は2002年のゲイ・レズビアン映画祭でも好評だったという。この作品も社会的偏見の根深い南部で、素朴に生きる人生に深い感動を受ける。作品の中に登場する「自然は多様性を愛でる。人間では何故そうでないのだろう」と投げかけられた疑問に、同様に頭を抱えてしまう。

最後に、女性同士の恋愛を扱った作品を取り上げたい。そこには、性の問題を含め、尊敬すること、愛すること、信頼することの素晴らしさが感じられ、時には心が締め付けられる思いがする。「ハイ・アート」(1998年)では、才能が恋愛に発展する例が示されるが、これは女性同士であっても何の違和感も覚えない。「Kissing ジェシカ」(2001年)では、素直に人を好きになる素晴らしさが感じられると同時に、人間はなかなか殻から脱することができないことを知らされる。

「彼女を見ればわかること」(1999年)という作品がある。タイトルからわかるように、当たり前存在する女性たち5人の主人公を据えた、5編のオムニバス映画である。この5編はまったく独立しているようで、お互いに絡み合い、物語を綴っていく。この作品の良さは等身大の女性を描こうというところにある。

このような作品に刺激を受けたのだろうか、ハリウッド女優自ら女優たちにインタビューを行って、恋や結婚、子育て、仕事などについて語ってもらうというドキュメンタリー作品が生まれた。「デブラ・ウィンガーを探して」(2002年)である。才能がありながら、突然映画界を去った俳優デブラ・ウィンガーへ含め、彼女たちの語る人生に共感を覚えるのだ。

7. 子どもの存在

子どもの権利条約によれば、子どもとは18歳未満の年齢を指す²⁴。アメリカ映画において、子どもはさまざまな場面で登場する。

まず、考えたいのが親と子の関係を描いた作品である。親と子の関係性を考えると、映画の中では「父親と息子」「母親と娘」が基本で、バリエーションとして、「母親と息子」という面に焦点を当てたものがある。

まず、父親の存在が息子にどう影響を与えたかを考えさせられるものとして、厳格な父を描いている「シャイン」(1996年)では、実在のオーストラリアの天才ピアニスト、デヴィッド・ヘルフゴットの半生の中で父の存在が大きいのしかかっている。一方、厳格な父がやがては息子の才能をバックアップして、息子の成功を応援するという「遠い空の向こうに」(1999年)がある。この作品では、NASAの技術者となった青年の科学的好奇心をバックアップする教員の姿もあり、親が敷いたレールとは違う人生を歩こうという姿が描かれている。似たような設定のものが、イギリスでも製作されている。少年がバレエダンサーになりたいという夢に対し、バレエは女の子のやるものだという偏見から脱し、息子の将来を支援しようとする「リトル・ダンサー」(2000年)である。

母親の存在が娘の人生を侵食するような関係を描いたものがあるが、数としては多くない。「地上より何処かで」(1999年)では、楽道家で思慮の欠ける母親とリアリストで賢い娘という設定で、お互いの人格を受容しながら互いの成長を描いている。一方、離れて育つ娘が他人色に染まっていくのが気に入らない母親の精神的圧力を感じながら、自分らしく育っていこうと努力する娘の姿が描かれている。「ホワイット・オランダ」(2002年)は、娘を自己の所有物のように感じる姿が見え、子育てをする難しさを感じさせる。2歳で離婚した後母親の下で育てられ、常に母親の存在を意識しているうちに、

鬱の世界に飲み込まれていく様子を描いた「私は『うつ依存症』の女」(2001年)は、実在の音楽ライターの自伝小説の映画化だ。

シングルマザーが息子とどう関わったらいいのかがテーマとなった作品がある。「ペイ・フォワード[可能の王国]」(2000年)である。父親不在の家庭に少年が通う学校の男性教員が結果として、少年を失った母親の支えとなって行く。当初、母親は少年にとって父親のような存在となる意図を持って接していたが、いつのまにか少年が母親のパートナーとして、その教員を導いていくように状況が変わっていく。母親よりも賢明な少年の姿がそこにあった。

一方、「きみの帰る場所 アントワン・フィッシャー」(2002年)はシングルマザーではあっても、結果的に子育てを放棄したことがわかるという設定になっている。主人公のアントワン・フィッシャーは本物の家族を知らずに成長したが、自分自身について知るために、本当の母を訪ね、初めて自分らしい心に落ち着く。人を愛することの大切さ、人の愛し方を知らないことの空しさに気づかせる秀作だ

子ども時代の記憶が予想もしない未来を築くことを暗黙のうちに示す映画は多い。恐ろしいサイコ・サスペンスになりやすい多重人格者の事件や猟奇的殺人のテーマになりやすい。今回は親子関係を直接的に描いた作品を中心に考えてきたが、機会を作って心の闇を分析することも必要なことのように思われる。

8. 終わりに代えて

映画を教材に用いることは多少の困難が生ずる。通常の映画が80分から120分程度の長さに編集されていて、90分の授業設定時間を考えると、十分な時間をとって考えるには、かなりの工夫が必要である。

テーマと鑑賞すべき視点が定まっていれば、どこ

をどのように観ればいいのか、どこから人権を読み取ることができるのか、どんな社会的背景があるのか、そういった部分が明らかになりやすいのである。

視点を提供することで、映画の観かたはずいぶん変わると思われる。今回はテーマ分類することで、その一助になることを考えたが、実際問題として、もう少し踏み込んだ映像の読み方を学ぶことも必要である。

今後考えるべきは、アメリカ映画における戦争関連のものだと思う。戦争の世紀だった20世紀が終了しても、世界の警察たる気分を持っているアメリカが、戦争をどう描くかで今後の世界は変わるのではないだろうか。

映画は一種のプロパガンダになることがあるし、人の心を動かすこともできるので、広範囲の人々に学習の機会を与えるものになろう。そういった意味で、さらなる分類や分析を今後も継続して行こうと思う。

[注]

- 1 名古屋市女性会館主催講座の『映像の中の女性』で、フリーライターの高野史枝氏が講師を担当していた。この講座を受講することで、映画を観る視点のひとつとして「女性」という明確な観点があることを知った。
- 2 浜野保樹「アメリカ映画のゆくえ」『アメリカ映画がわかる』2003年、アエラムック、朝日新聞社、p172によれば、ハリウッド映画業界のデータとして、2002年は543本のアメリカ映画が作られている。また、わが国でもスクリーンで上映されている6割以上がアメリカ映画だという。
- 3 碓井敏正『国境を超える人権—21世紀人権のフロンティア—』2000年、三学出版有限公司、によれば、権利の内容と主体に関して歴史的流れを簡潔に概観している。まず、内容でみれば、権利は信仰の自由をはじめとする自由権の保障から始まり、労働者階級をはじめとする民衆の自覚の向上とともに、生存権や参政権へと発展

- し、現代では知る権利やプライバシーの権利、環境権などの第三世代の人権が権利の目録に入りつつあると述べている。次に、権利主体の発展という点では、一部の特権階級のものから成人男子市民へ、さらには保護の対象とされてきた女性や障害者、子どもへと拡大されてきたと述べている。
- 4 国連が中心となって作成した人権関連諸条約にはさまざまなものがある。社会権規約および自由権規約をはじめ、人身売買禁止条約、ジュノサイド条約、難民条約、移住労働者条約などがある。
- 5 アムネスティ・レポート『世界の人権 2003』によれば、2002年12月31日現在の国際人権条約批准状況による。ちなみに、日本は3条約とも批准している。
- 6 例えば、映画は興行成績（観客動員数）がひとつの尺度になっている。
- 7 例えば、長坂寿久『映画で読むアメリカ』では、アメリカにおける映画の役割について記述し、映画制作と社会的背景についての考察を行っている。p9－19参照。
- 8 野村達朗『「民族」で読むアメリカ』、講談社現代新書、1992年、p142参照。
- 9 ナンシー・グリーン著、明石紀雄監修『多民族の国アメリカ』、創元社、1997年、p99－p101参照。また、ユダヤ系がどんな方法でハリウッドでの力を得るに至ったのかを、「変身の儀式」を通じて行われてきた。その詳細は、越智道雄「アメリカン・スピリッツはマイノリティがつくった!」『映画宝島 異人たちのハリウッド vol.1』、別冊宝島、1991年、p27－p32参照。
- 10 拙稿「地域社会の文化学（4）－多文化共生の試練＜アメリカ合衆国＞」『グローバル社会入門』、黎明書房、1997年、p175参照。
- 11 民族の分類として、ホワイト・エスニックというカテゴリーは非常に大雑把である。1880年までの中心的移民集団はWASPをなすイングランド系を含む北西ヨーロッパ出身者であったが、1881～1920年の間には南・東ヨーロッパ出身者に移った。この新しい移民送り出しの地域は、文化的に大きな違いがあった。詳細は、野村達朗、前掲書、p76－p109参照。
- 12 野村達朗、前掲書、p117－p123参照。
- 13 野村達朗、前掲書、p175－p181参照。
- 14 台湾の父親像をモチーフにして制作された、「推手」「ウエディング・バンケット」「恋人たちの食卓」の3部作のことである。
- 15 ベトナム三部作として、「プラトーン」、「7月4日に生まれて」「天と地」がある。
- 16 アメリカ移民帰化局 2000 年年報 HP のアドレスは、<http://www.ins.gov/>、他の出身地域との比較は、拙稿「社会・文化的理解の考え方・深め方」『アメリカの教え方』愛知教育大学米国理解教育プロジェクト運営委員会、2003年、p43参照。
- 17 詳しくは、映画の公式 HP を参照。アドレスは、<http://www.cqn.co.jp/BandR/index.html>
- 18 越智道雄『ワスプ (WASP)』中公新書、1998年、p11－p12参照。
- 19 越智道雄、前掲書で、この映画について分析を行っている。詳細は、p45、p49－p52、p170－p172、p176－p178を参照。
- 20 エリック・グリーン著、尾之上浩司・本間有翻訳『「狼の惑星」隠された真実』扶桑社、2001年、本書の記述を参考にして、記述を進めた。
- 21 複雑な人種差別の実態を知らせる映画も制作され続けている。例として、「アメリカン・ヒストリーX」（1998年）、「チョコレート」（2001年）などがある。
- 22 明石紀雄・川島浩平編著『現代アメリカ社会を知るための60章』明石書店、1998年、p149参照。
- 23 日本では、近年、競艇の女性選手が男子選手へ変わった事例がある。
- 24 中野光・小笠毅編著『ハンドブック 子どもの権利条約』岩波ジュニア新書、1996年、p18参照。